

「ひとりでも生きられる」

瀬戸内寂聴 / 著 青春出版社 2002年2月発行
2階一般開架書架 (請求記号:914.6/セト)

「人は人を愛していると思ひ込み、
実は自分自身だけしか愛していない場合が多い。」

「恋を得たことのない人は不幸である。
それにもまして、恋を失ったことのない人はもっと不幸である。
多くを傷つくことは、多くを愛した証である。」 (本文より)

この本を読んでいるとハッとさせられ、
気づかされることが多いように思う。
相手への愛情が憎しみに変わるほど苦しく惨めで悲惨だった恋愛も、
誇りに思えてくるから不思議だ。

人を愛するという事、自分の「愛し方」を見つめ直すには
絶好の一冊ではないかと思う。

「かかしと召し使い」

フィリップ・プルマン / 作 金原瑞人 / 訳 理論社 2006年9月発行
1階子ども読書室開架書架 (請求記号:93/フル)

名家の変わり者のおじいさんが、数ある問題のうち鳥払いくらいはと、カブ頭に麦わら帽子をかぶり、つぎはぎだらけの服を着たかかしを作った。ある日、このかかしの稲妻が落ちて動き出した。かかしは自分を作ってくれたおじいさんの言いつけを守り、困った人をみたら助け、女性には親切に、盗賊や悪党を懲らしめて、自分の仕事といるべき場所を求めて突き進んで行く。しかし、やることなすこと、みんな見当はずれで、失敗続き。ところが、まだ幼いけれど、賢く、機転のきく召し使い(少年)を得て・・・

少年と“かかし卿”の迷コンビが繰り広げる不思議な旅。深く考えさせられるような場面はないが、軽やかでユーモラス、ナンセンスなファンタジー。同著者の『黄金の羅針盤』とは、また違った味わいの作品である。